



氣質に付て

松本孝次郎

氣質を研究するといふ事は昔から大事に考へられて居る。一人の人間の人物といふ事の大部分は其氣質に由て定まるからである。而して學者は大抵感情の部分に於て論じて來たけれども感情のみに由て氣質が定まるものではない。知情意身体の状況等に由るのである。恐らくは胎兒が母胎内に居る時に母親の受くる影響に由てそれ／＼胎兒に關

係するので母の身体精神の状況に由て氣質に影響するのである。生後は育て方家庭の境遇等により氣質が違て來る。さて氣質といふ事に付ては古來有り來りの分類の仕方を考へ且つ深く今の分類に付て考ふべきである。古來の分類の仕方は中々廣く社會に行はれて居る。それは多血質、粘液質、神經質、膽汁質等である。之を知らぬと氣質の話はできぬやうになつて居るが此四は各特點を有て居る。しかし子供を観察して其氣質を表はす時に此四の内のどれにしてよいか分らぬ事が常であるして見ると此分方はもつと改良しなければならぬもつと精密に言ひ表はしたいといふのに下の如くに分けるのでどうであらうか。

一、感動的氣質　感動の深い氣質を言ふので何か言はれると直ぐ氣にかけるとか泣き出すとか凡

て感動し易いものである。但し此内に又三種ある。
 (い) 非常に感ずる事強く知力作用弱く實行の力少
 なし。即ち意志の力の弱いもので感動的の中の劣
 等のものである。

(ろ) 感ずる事も強く知力も中々よくはたらく。只
 意志はあまり強くない。

(は) 感動強く知力は事柄に由てよくはたらく。た
 とへば詩ならばよく書けるとか音楽が巧であると
 かで活動も少しはする。けれども之は鍍金なので
 土台は活動ざらひであるのに情の爲に一時活動す
 るので意の活動ではない。大人では文學者畫家音
 樂家などにあるので之等は勉強しだすと非常にす
 るので全く情に驅られるのである。

二、活動的氣質 自分ではたらくを好むので常
 に何かをして居るものである。

(い) 知力があまりはたらかぬけれども何か活動し
 て居るので大人で云ふて見れば幹事に適するとか
 世話役に適するやうな人である。

(ろ) 知力十分にありて其上に活動も十分なので考
 へた上で十分自分で活動する。シーザー、秀吉は
 此類の人である。

三、冷淡的氣質 之はあまり感動もせず活動も
 扣目なのである。

(い) 知情意のはたらかが少いもの。

(ろ) 知力はあり情意はあまりはたらかず冷淡なの
 で専門學の學者などにかやうな氣質がある。活動
 を好まず書でも讀で居る如きものである。フラン
 クリンなどは此例で必要に迫られると活動するが
 なるべく出過ぎぬやうにするのである。

以上感動的活動的冷淡的の三は簡短であるが此三

では表はしきれぬ複雑なのを表はす爲に以下に舉げるやうな補をする。

四、感動的兼活動的氣質　之は感動も強く活動

もするのである。婦人などには随分あるのでよく感じよく働く。良き例はルーテル、日蓮、などのやうに非常に感じて社會上大事業をするのである。

但し悪く行て知力足らずに此性になると下等社會の人間の常に喧嘩して居るやうなものになる。

五、冷淡的兼活動的氣質　冷淡と活動といふ正

に相反したやうな性質を備へたものがある。たとへば神社佛閣で行をして居る大人などは落付て冷

淡に構へて而して行といふ働をして居る即ち其事を十分熱心に強き意志を以てして居る。

六、冷淡的兼感動的氣質　平生は冷淡で時々感

動すると活動する。但し其感動活動は永く續かず。

勉強しても三日坊主で直ぐ止める人間などは此類で子供にしてもアキツポイ兒である。

七、調和的氣質　之は實際あるかどうか分らぬ

が若しあつたならば圓滿で何方にも偏せず知情意が皆よく働くのであるから教育上の氣質として之に近かしめんと望を有つべきである。

古來のやうに四に氣質を分けるよりは今述べたやうにする方が精密であると思ふ。此どれにも入らぬのは病的なのである。

氣質に付て教育上に注意すべき事を舉げて見ると調和的氣質に近づかしむる事は理想である。道徳

上の修行のつみし人は之に近い氣質になる。又幼兒は其境遇の變化、教育法等に由りて幾分か氣質をなはしてゆく事ができる。殊に友人間の勢力に

由て感化するのは最も効力がある。

冷淡的の氣質は極端になりて失敗する憂はないが
熱心でないのが欠點であるから熱心になるやうに
導かねばならぬ。

感動的の者は同じ訓戒でも直ぐ強く感ずる故に割合に弱くてよろしい。之に反して活動的冷淡的の
は強くする必要がある。

感動的の兒には活動を多くやらせるがよろし一体
氣質の組織をよく考へて之に相應適當した訓練法
を施すべきである。又氣質と身体はよほど關係が
あるから生理狀態によほど注意すべきである。

自然物の色

木の葉を見ますと滴らんばかりの緑の色で白
合の花は飽くまでも氣高く眞白である、又中には

かはひら

美しき紅の者もあればゆかしき紫のものもある、
或はまた是等の種々の色が相混じて一つの色をな
して居るものもある、かく自然界に於けるものに
ても色々に其色が違うて居りまするが之は何が原
因となりて居るのでありませうか、どういふ譯で
木の葉が緑に見え、白百合の花は眞白に見ゆるの
でありませう、之を説明しまする前に少しく一二
の事例を前に説き明かして置く必要があります。
一体、物の見えるといふとはどういふことかとい
ふに太陽の光(電氣燈、らんぷ等の光は除外して)
が物に當りて之が復び目に達するからであつて苟
も光がなければ物が見えない。月も星も出て居ら
ぬ夜には、光線が極めて少ないから、殆んど少し
も人間には物が見えない、月が出て居るとか星が
出て居るとか少しでも光があれば幾何か物が見え